


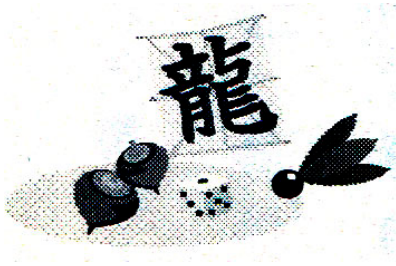
六花

1

俳句雑誌りつか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



初風や舟屋は舟をみごもりて
寒風に動く物みな光帯ぶ
琴の音をたてて若井へこぼる水
岩牡蠣の殻墨壺に賀状書く
立つ雲も雲流るる雲も年つまる
伊勢海老を飾りたちまち飛ぶごとし
階段に書のもどりたる三日かな
元日の雲に近づき遊ぶ鳶
淑気かな足裏に固き青畳
千両の末広がりには生けてあり
差しきたる柱時計の初日かな



初氷指もろともに割れにけり
たをやかな日差しに眠る霜の畑
元日や明石おお門との勇み潮
傾きて元日の月潤みけり
夜更かな賀状の礼を賀状もて
去年今年柱時計の時合す
散骨や身を切るやうな冬の滝
凧たる舟屋の舟の輪飾りに
母の病む報せを聞きし三日かな
手向花ふるへをりけり初景色
陸くわを背に正月凧を伸ばしけり

わづかづつ向き違へあり稲架襖 笹村 政子

わづかづつむきたがえありはざぶすま さとむらまなこ

角切の眞白き鹿の枕かな

角切や鹿の枕のずれてゐて

角切られ煎餅を乞ふ眼かな

秋の蝶己の影へ重なりぬ

稲架襖（はざぶすま）は刈り取った稲を自然乾燥するため稲束を横木に掛けて干したものだ。その様子が大きな屏風や襖を立てかけたようにみえるところから稲架襖という。その稲架が僅かではあるが少しづつ向きを変えてあるというのだ（俳句の表現はここまで）。（以下は鑑賞の領域）。稲を刈って干す頃にはもう夏場の力ある太陽とはちがって弱い。だから少しでもそれぞれの稲（稲架）にまんべんなく日光や風を当てるため工夫して向きを変えてあるのだ。農業の智慧は地方地域によって時期、太陽の角度、気候などが少しずつ違う。その土地に根付いて永年培ってきた人びとの伝統的な物に思いを馳せさる。地味ながら滋味のある作品である。味わえる俳句は佳い。

青空へせり上がりゆく稲田かな 平居 滯子

あおぞらへせりあがりゆくいなだかな ひらしみおこ

曼珠沙華糸玉紅あかくもつれゐし

コスモスや二上山を押し上げて

猪垣に錠かけてあり登山道

秋天の濃かり高層ビルの窓

豊かに実った棚田を下から見上げて
 いる。垂れた稲穂がほとぼしる滴水のよう
 に見える。その豊穡の光景を落ちてくる
 というのではなく「せりあがりゆく」と
 表現した。滝を見ていると視線が勝手に
 上へ上へと移ってゆく。目の錯覚の「せ
 りあがりゆく」である。嗚呼！と感動し
 たその感動が伝わってくる。圧倒される
 ような実りの光景。下から見上げた棚田
 の稲が落ちてくるような感じを逆にして
 「せりあがりゆく」と詠んだからといっ
 てそれは特殊性を狙ったのではなく、感
 じたままの表現が結果的に意外性となっ
 て成功した。感動の昂ぶりが治まらない
 うちに詠むと主観が強くなるどころだ
 が、そこをあるていど抑えて格調高く詠
 んでいる。

小鳥来る

貝森光洋

小鳥来る一羽はことりかも知れぬ
流れ星一期一会といふ言葉
ふうせんかずら程の我が身の軽さかな
戯れに妻の影踏む秋の暮
豊の目青々とあり冬座敷

魚 道

梶浦玲良子

木の実降る坂小走りに坂よぎる
ながれ雲柿含羞の色となる
厄日過ぐ満艦飾の孔雀の目
すり鉢の底より放つ威銃
堰堤の魚道ぎやうどうひしめく盆の波

雪 卿 集

鹿の枕

笹村政子

角切の眞白き鹿の枕かな
角切や鹿の枕のずれてゐて
角切られ煎餅を乞ふ眼かな
わづかづつ向き違へあり稲架襖
秋の蝶己の影へ重なりぬ

水琴窟

松本文一郎

丹田にひびきて来たる大花火
星月夜焦点合ひたる土星の輪
秋立つや水琴窟の軽き音
秋風の頬を撫でゆく屋台かな
虫売の籠を並べて無言なり

冬 菜

佐津のぼる

引売りの荷にあをあをと冬菜かな
日向ぼこ居眠りつつもどこか覚め
日向には日向の音の落葉踏む
数へ日のひと日葬^{ほふ}りに使ひけり
地に乾され丸まる落葉反る落葉



せつじゆしゆう
雪樹集

月光

永田万年青

月光や川を漂ふ鞠ひとつ
月光や道の裂け目に力芝
玉砂利の音の響きて秋惜しむ
天高く白光しぬし雲の縁
手の届くところまで柿たわわなり

彼岸花

志方章子

鶏頭の紅すこしづつ色違ふ
台風を前の大声ビル現場
青空の見えぬる秋の時雨かな
一群れが一花のごとし彼岸花
どこまでも木犀の香を免れず

螢雪譚 六甲

戯れに妻の影踏む秋の暮

貝森 光洋

「三尺さがって」師の影をふまず。または「三尺去って」師の影を踏まずということわざを踏まえた作品。「先生に随行するときは、間隔をとって影を踏まないようについていくべきだ」の意で、「弟子は師を尊んで、礼儀を忘れないようにしなければならぬという教え」をもじって恐妻家？いや失礼、愛妻家に当てはめてみた。人恋しい秋の夕暮れ、妻の影を戯れに踏んでみたら、妻がにらみ返した。もちろん本気ではない。妻もそれを知っている。だのに、妻の一瞥に耐えられず「ごめんごめん」と、手をこすり合わせながら三尺跳び下がって平身低頭。妻は「あら冗談よくん怖がらないで」と鼻にかかった声で笑い返す。だがそこで調子に乗ってはいけない。ひたすら謝る姿勢を保たなければいけない。妻が喜ぶ物をプレゼントしてからようやくリセットできる。とは孔子の教え？。「畳の目青々とあり冬座敷」青い畳はすなわち新しい。新しい畳は夏は涼しく、冬は一層寒さを感じさせる。だがその冬座敷の青畳の匂いは凛として背筋の伸びる思いがする。そこを青々と云ったが、畳ではなく畳の目としたところにこだわりを感じる。「小鳥来る一羽はことりかも知れず」は亡くなっ

たことりへの哀悼を含んだ追悼句。ことりとは気の合った
貝森さんらしい。ことりは貝森さんの飛び抜けた「雪女」
の句と「うぐいす餅」のような名句を待っていたのだが間
に合わなかった。「流れ星一期一会といふ言葉」も一期の
重みを重く強く感じているのだろう。本来、「二期」は茶に
臨む際、その機会を一生に一度のものとして心得て、主客とも
に互いに誠意を尽くせという茶会の心得。明日又会えると
思っではいけない。私もその言葉の重みを噛みしめている。

(以下略)



六花集

暮深白ど鶏
 や秋足の頭の
 すや袋の空の
 き風のも秘
 裏に突青め
 の吹つば極た
 山かる興り陰
 畑るや蔓蔵
 蛇る秋珠し
 穴虫まつ沙を
 入のつり華り
 る声り

藤生不二男

蠟秋秋虫柿
 螂ののの熟
 の山の蚊の聲る
 鎌の山のゆ重る
 を日はるなり空
 を上滔滔と合々
 げと暮ちるて広
 たるれ夕ま尚が
 落暉にけく寂り
 かなりれしぬ

五ヶ瀬川流一

秋猪コ曼青
 天垣ス珠空
 のにモ沙に
 濃錠ス華せ
 かか二糸り
 りけ上山玉あ
 高て山を紅が
 層あをくゆ
 ビり押しもつ
 ル登し上れ
 の山上げぬ
 窓道てしな

平居 滯子